

(十) 労働團體會員を一人々々勸誘して團體を脱會させる方策を取る。

(イ) 雇入の際個人契約を結ばせ、若し後日同盟罷業に加擔すれば其際残つて居る未拂賃銀を沒收する契約を取る。

(ロ) 養老年金・養老保険其他の特典制度を設けて労働者が永く動かずに働く様にし、若し同盟罷業に参加すれば何時でも是等の特典を皆取消し沒收する。

(ハ) 年末賞與・年末配當等を現金で無く會社の株券で與へ、又は株を職工には特に割引安價で賣つて彼等が平常の貯金を投資させ、同盟罷業をした者には何時でも此株の全部を沒收し又は其れに附隨する特權を取消す契約を結んで置く。

(ニ) 特別能率の高い労働者には勞體團體設定の標準均一賃銀よりも更に高級の割増を拂ひ、工場衛生法や安全設備を完全にし、労働者家族に住宅安價供給の特別便宜を與へる等種々の優待法を講じて、彼等が労働團體に附いて居て時々喧嘩をしたり飯を食ひ損ねたり心配するよりは此方が餘程樂で且満足だと云ふ様な觀念を起させる。少々進歩的なそして賢明な雇主等は當時皆此手段に依つて成功して居る。

(二) 間諜制度 探偵・一諜制度を設けて絶えず労働團體側の行動を調査し、其機先を測して勝つ。例へば其首領等や團體經營の弱點を發見して是を利用し、騒擾を豫め揉み消したり又は労働者軟化運動をして罷業を破壊する。

(三) 豫め有力な同盟罷業破壊業者や怠業破壊團員を組織して置いて、罷業や怠業の起つた際には早速是を其處に派遣して破壊してしまふ。

(一) 對抗労働團體と云ふ者を所々に組織して、普通の労働團體の運動を牽制阻害する。

(四) 警官及び軍隊の利用 同盟罷業破壊團を用ひてドシヤ々仕事を繼續すれば、罷業團體と破壊團體との衝突が起つて往々血の雨を降らす事がある。其際に法律の保護は必ず資本側に強いので、政府に願ひさへすれば警官又は軍隊が出動して、同盟罷業破壊團と工場とを保護して呉れる。つまり労働者最後の武器は暴力であつて、雇主側の巨砲は法律と是に附隨する國家機關である。労働者が暴力に訴へるのも、一つには自分達が正當だと信ずる行爲に對し自分等の方には法律の保護が無いからなのである。

(五) 労働團體の干渉や防害行動に對し悉く民事・刑事の訴訟を起して労働者側を追求する。又全國

を通じて労働立法反対や阻害運動を爲し、代議士を一々訪問して買収したり強談したり、其れでも承知しない者には選挙の際に極力妨害する。又印刷刊行物・御用演説・手紙配布・廣大な新聞廣告等で労働團體の立場を非難し、社會公衆の利益の爲め何うしても是等の社會立法に反対しなければならぬと云ふ理由の宣傳をやる。

(六) 選挙時には政治運動を開始し、『公共心・愛國心に富む人士は皆政黨政派の別を忘れて、最も正氣で安全な候補者即ち反労働的大政治家に投票し、人氣取的煽動政治屋の労働候補公認自認連中を悉く排斥せよ』と叫ぶ。そして労働團體の罪惡や労働候補者の缺點を大袈裟に暴露列挙して、盛んに反労働的輿論の喚起に務め、同時に多大の運動費や運動應援人を労働反対候補者の陣中に送つて其當選を助ける。

(七) 新聞政策を利用して反労働的輿論の發生を促す。新聞買収、特別刊行物の利用、労働の味方をする新聞雑誌の攻撃迫害、労働派から出たと思はれる一切の新聞種子の掲載を妨害阻止する等色々の手段が行はれる。

又同盟罷業の際には時々刻々其模様を新聞に報導し、罷業は賃銀値上・労働時間短縮・工場設備の

改良等即ち労働者の生活状態向上の目的では無く、唯だ門戸閉鎖制度強制其他工場管理權を奪取し様とする社會主義的『亂臣賊子』の暴行であるなど、説明する。又同盟罷業が公然只だ賃銀引上要求拒絶だけを非難して起つたのである場合には、工場は現に普通以上の賃銀を拂ひ居る事、目下の市場の景氣では其れ以上一文も多く拂へぬ事、若し強いて此上賃銀を増せば會社が損するか又は賃銀増加額の全部を物價の上に轉嫁して一般消費者に負擔させ即ち一般生活費が上るより外に道は無い事、そして此馬鹿な同盟罷業に依つて如何に雇主側も亦労働者側も共に毎日莫大な損失を招き、随つて一般公衆も其惡影響を受けなければならぬか等の事を盛んに新聞紙上に發表する。

以上列舉した様な種々の労働運動對抗策を大規模の組織立つた方法で一年中間斷無く繼續するのであるから、労働團體に向つては最も恐るべき強敵である。我が國でも今後益々労働團體が發達すれば追々又此種の雇主同盟も出来る事になるだらう。

第十七節 資本家思想

人間の思想や觀念は皆其實生活上の環境に依つて作り上げられる者だから、随つて是等環境の相

違に依つて多少の違ひがあると云ふ事は既に説明した。そこで労働者には彼等階級として自然に備はる一種の物の見方がある。本章を通じて各方面から説明した労働運動は其穩健たる過激派たるとの別なく、皆此労働思想の發現に外ならない。そして以上の研究に依つて吾人は労働者が一體何んな境遇に生活して何んな考を持ち、何う云ふ風に社會・政治・及び經濟問題を解釋するかと云ふ事を知つた。が併しまだ労働の對照たる資本側に付ては是等労働運動の説明中此處彼處に關連附隨して説いたゞけであつて、纏つた研究はして居ないから、是から、暫時其れを考へて見よう。

丁度労働階級が一種特別の思想見解を持つ様に、資本階級は又獨特の思想と見解を持つて居る。併し此資本思想と云ふのは別に何も新しい發生物でも創設物でも無い。實は極く古い々々在り來りの者——更に解り安く云へば一般傳統的風俗・習慣・道德・法律・其他の社會制度に現はれ、そして吾人が普通財産や職業に對して持つて居る當り前の事だと思つて居る其思想や見解と略ぼ似た様な者なのである。が併し明瞭を期する爲めに以下是を分析列舉して見よう。

(一) 各階級や個人間の利害關係は總て當人達の實力に従つて自然に調節される。そして人皆其地位に安じて、天下泰平が常態であるべき筈なのだから、平和を擾亂する労働團體の行爲は元より穩當

を缺く。

(二) 雇主側即ち資本や財産や生産業を代表する者の利害は常に一般社會の利害と相一致する。だから雇主の利益を侵害する労働團體の行爲は不正不法である。

(三) 労働者の利益は全然雇主の利益と調和合致するのであつて労働者が其雇主に反抗するのは全く不徳義な労働團體首領等の教唆煽動に誤られた結果なのだから、是等労働首領等こそ不届至極な社會の公敵である。

(四) 雇主は労働者に結構な仕事を與へ、お蔭で彼等は安樂に食つて生きて行けるのだから、此雇主に反抗する爲に合同徒黨を組むなどとは忘恩不徳以ての外の不心得者である。

(五) 雇主は自分の思ふ儘法律の許す範囲内で如何様にも自分の事業を經營管理する絶對權を持つて居る。此貴重な權利に干渉する労働團體は國法の敵である。

(六) 雇主は自分の商賣や所有財産を法律の禁じない限りに於て勝手に管理處分する絶對權があるのだから、無理に何の關係も無い労働團體と労働雇傭契約をさせられて個人たる各労働者とは直接取引が出来ず。又自分の使つて居る労働者を解雇するにも團體が干渉して自由にさせず、おまけに工

場内の仕事具合に付て迄直接關係の無い第三者たる團體役員などが出娑婆つて干渉するのは財産權・職業權の甚だしき侵害である。

(七) 雇主は自分の使つて居ない無關係の一般労働者に對しては、假令其商賣の仕方が彼等の氣に入るまいとも、又は間接的に彼等の利害と相容れまいとも、そんな事には構はずドシヤ々やつて良い商賣上の權利を國家から與へられて居る。それだから第三者たる外部の労働者達が自分の使つて居る労働者に同情して干渉妨害するのは全然不法である。

(八) 各労働者は何時誰の工場で何んな職業をして働かうとも勝手である職業上の絶對自由權を持つて居る。其れだから労働團體が會員以外の労働者に干渉して此自由と權利を阻害する行動は、道徳上法律上共に免すべからざる大罪惡である。

(九) 労働も資本と同様各個人の自由競争で發展するのが經濟上の原則で又社會の利益になるのだ。其れだから此自由競争に干渉する労働團體の行動は大に非難しなければならない。

(十) 出来るだけ多く品物を作り出すのが一般消費者たる公衆の利益になるのだから、工場の生産高に制限を加へる労働團體の行爲は公益侵害である。

(二) 法律・法廷・警官は是國家社會の最も公平な審判者で、且絶對の權利と正義の表象である。其れだから法令に違反し警官の命令に背く労働團體の行爲は一切罪惡である。

と數へ立てれば労働團體を非難攻撃すべき材料は可なりに見附かる。そして官吏に限らず一般に頭の古い連中は別段反省もせず、只だ此通りに信じ切つて労働征伐に取掛るのだから堪らない。成る程是等の非難は其れだけ傾聴すれば一應最もらしく聞えるのである。が併し一體此判斷の土臺となる正義・權利・自由なんかと云ふ者は何處から割り出した者か。天から降り地から湧いて永久不變天壤と共に無窮に存続する固定物だらうか。いや、そんな化け者は哲學者の寢言か馬鹿の夢以外に人間世界には決して存在し無い。人間も社會も固定して動かず、其處に絶對不變の眞理なんと云ふ都合の良い寶物が實際存在すれば、世の中に決してこんな面倒は起らないのであつて、それこそ萬事がキチンと極つて丸く治まる事極樂淨土を目前に現出するが如しだ。

併し權利や正義や善の唯一の基礎は社會の福利と是を認容する輿論を措いて他に何處にも無い、そして此問題は非常に込み入つて居るから、是以上説明を進める前に話の筋道をも少し具體化させて置かう。

第十八節 勞働者より資本家に反問

喧嘩は片方の云ひ分だけ聽いて居るのではなか／＼要領を得ない。先づ雙方の主張を聞き取つてから公平の判断を下せば、解決も比較的容易である。そこで今の世の中に勞働側の腑に落ちない事が澤山あるから以下其れを並べて見よう。

- (一) 雇主側の利益は全然是と相一致し勞働團體の行動は全然反對になると云ふ正義・權利・道德を代表する社會一般の福利とは一體何んだらう。
- (二) 一例として新發明機械の採用問題を見よう。なる程是を使ひさへすれば餘計に生産が出来る。餘計に生産して餘分に消費すれば則ち社會が進歩する。併し此急激な生産方法變更の爲めに幾十萬人の勞働者が蒙る色々の悲惨な影響損害は一切無視して、なほに勞働者などは社會進歩の犠牲になれば良いのだと云つて平氣で居ても良いのだらうか。
- (三) 既存の所謂權利は其種類の何たるを問はず、一切昔の解釋のまゝで是を保護遂行させる者を法律だと解釋すれば其れで公僕の義務は済むか。此權利や法律と名の附く者は一體何處から何うして

出て來たのか。

(四) 又吾人は自然の法則に調和する行が善で是を遂行するのが權利、又其據る道が正義だとかういふ風に解釋すれば良いだらうか。然らば何が自然か。自由競争が自然か、又は或る種の人爲統制を其れに加へた者が自然か。古來自由競争が生んだ幾多の恐るべき弊害を見、其れが爲めに國家社會の統制機關が必要になつた理由を知つて居れば其答は自ら解る。其れでは一體『自然』と云ふ理想標準は何んだ。

(五) 雇主は勞働者よりも多量の權利を持つて居るのか。若し雇主が勞働團體の干渉を非難する權利があれば、なぜ勞働團體も雇主が是に干渉する事を非難する權利を持つてないのだらう。雇主同盟は直接利害關係も無い無辜の勞働團體を壓迫放撃するでは無いか。

(六) 雇主は勞働者に仕事を與へて是を保護助長すると云つて居るが、勞働者は其れ以上の利益を雇主に與へて其便利を計つて居はしまいか。

(七) 合同した強大な資本で事業の經營を統制して居る雇主は、勞働者もやはり合同して勞働供給を統制するのになぜ反對が出来るだらう、資本の合同は神聖な權利でも、同じく生産の一要素たる勞

働の合同は権利にならないのか。

(八) 雇主は自分の工場に起つた勞資争議に就ては自分が直接使つて居ない第三者たる外部の勞働者から何等干渉を受けない権利があるさうだが、併し其権利は勞働者側が自分の直接働いて居る雇主でない第三者たる他の雇主達から自分と自分の雇主間の争議に付て強制干渉を受ける事を拒絶する権利よりも大きいのだろうか。若しさうなら其れではなぜか。

(九) 勞働者は他の勞働者の上に及ぼす影響如何に拘はらず、何時何處で誰の爲めに何んな仕事をし様とも勝手たるべき絶対自由の職業權を持つて居るさうだ。併し其れでは彼等は他の同業勞働者の職業を侵害して共食ひ生活に陥りはし無いだらうか。

(十) 若し勞働者が直接自分達の雇主に向つて怨は無くも、他の苦境に陥つて居る同業者を補助する爲めに自分の雇主の事業に干渉する事(同情同盟罷業の類)が不正であるならば、なぜ雇主が直接不服の無い自分の勞働者に向つて他の雇主を補助する爲めに干渉壓迫を加へる行爲(黒表制度の類)も等しく不正不法にならないだらう。

若し勞働者が無辜の雇主を害する事は出來無いと云ふならば、なぜ亦同様に雇主も無辜の勞働者

を害してはいけないと云はないのだらう。勞働者が第三者たる他の工場主と争議を構へると工場主が第三者たる他の工場の勞働者と争ふのとは全然同一性質の職業干渉であつて、兩者間唯一の相違は一方の職業は資本の利用・他は勞働の利用と云ふだけの點ではないか。

(二) 以上の争議に於ては勞資雙方共勿論自分等の持つて居る最上の戰略と最良の武器を使ふ。若し吾人が勞働者の合同結束した對資本要求貫徹武器たる同盟罷業や同盟非買は不法・不徳・反社會的であるが、資本の合同結束體たる大會社や雇主同盟が自己の利益の主張を貫徹する武器たる勞働團體員の解雇・黒表制度・罷業破壊團使用・對抗勞働團體の組織活動などは皆神聖な財産權・職業の自由權等の行使發現で立派な者であると云ふならば、是は唯だ吾人が前節に述べた資本思想の虜はれ人になつて居る結果である。

資本家同士の協力發展が正當ならば、なぜ又勞働者同士の協力發展も正當でないのか。どんな理由で資本と資本家の利害のみが社會全般の利害と融和一致して、社會の大多數を占むる無産勞働階級の利害休戚は公衆の利害休戚と合致しないのか。若し各雇主が對絶に他人の干渉を受けず勝手氣儘に自己の事業を經營する権利があるならば、なぜ又勞働者等も他人の干渉を受けず、思ふまゝに就

業し罷業し、協同一致の行動を取つて、互に同情共済の道を講ずる事が出来ないのだらう。

以上の諸出問を悉く完全に労働者及び一般民衆の腑に落ちる様に答へられれば、資本思想は確かに正當であつて、又資本階級の行動は概ね皆公益を増進する貴い性質の者ばかりだと云へるだらう。

第十九節 傳統に虜れたる資本思想

以上二節を通讀しても一向労働者側の主張出疑に共鳴の點を見出さず、只だ益々深く資本思想に同感するばかりならば、其れは其頭が徹底的に傳統的思想慣習に染み、何を見ても既存の方法が自然で既定の制度が正當だと見える色眼鏡を掛けて居るからである。

吾人はどうも何事に限らず既存の制度が自然且正當であり、又反對に其古いのを侵害して將來に出來上らうとする形成過途期にある新參者は一切不自然で、變態的で、不正不法の様に考へる傾向がある。是は人間共通の保守的性質に基いて居るので、餘り急激な變化を防ぎそろ／＼と健全な發達を遂げる爲めに自然に具はつた人間性であるから勿論大に必要な者だ。併し是も度を超せば良藥變

じて毒藥になると等しく全然有害無益になつてしまふ。それだから良い事だと云つて無闇に保守性に盲從せず、時勢の推移・社會生活の進化に伴うて舊思想・舊制度・舊事物が不適當になつて來る事を考へて、自然の進化に伴うて行かなければならない。

資本家たる雇主は過去幾百年來斯様々にやつて來て、其れが習慣上・法制上チャンと認められて居るのだから、其れこそ即ち自然であり公正であると云ふ論法は當らない。労働者が個人の人格を認められ、人間としての活動即ち從來の雇主側と略ぼ似寄つた生活を始めたのはまだ極く最近の事である。其れだから彼等がする事はどうも目觸りになり、不自然で不正で生意氣で出過ぎ者の様に思はれる。勞働階級と云へば唯だ牛馬同様命さへ繋いで居れば何もて句を云はず、ペコ々々頭を下げて『檀様那どうも有難う御座います——へエ何んとも申譯ありません』とヘタパツテばかり居た姿がまだアリ々々と眼に附いて居るからである。つまり吾人の頭の中には古い々々『絶對』思想の餘勢がまだ残つて居て、口には進化進歩を唱へても實行がなかく／＼に六づかしいのだ。

こんな傳統思想が間違つて居ると云ふ事は、權利や正義の根源と性質を探究して見れば直ぐ解る、權利とは唯だ社に依つて認められた人間行動の自由範圍であつて、正義とは社會が其福利と調

和すると認めた人間爲の標準の事である。所で此社會と云ふ者が常に大多數の意見や利害を代表する輿論の結晶であるかと云ふとなか／＼さうで無い。傳統の社會や國家——勞働者や一般民衆が蜂蟻の如くフワ々々と暮して居た時代の社會國家——は事實小數特殊階級の權力の結晶體であつた。大多數の國民などは『人民』『平民』『下郎共』と云ふ稱號を有難く頂戴致して、それはもう發言權も、人格も、生命・自由・財産・職業の保證も殆んど其存在を認められて居なかつたのである。

やれデモクラシーは神代からあつたとか無かつたとか、何の何様が御開祖だとか今頃飛んでも無い新發見をしてチヨン鬮道學やヨボ々々歴史などが悲鳴を揚げながら辯明力説大に御弊を擔いで見ても、そんな位の事で儼存した争ふべからざる過去の事實を抹殺燬滅する事は出来ない。其れは又例外でも何んでも無く世界中至る所に行はれた通則なのだから、格別申譯も無用であれば又無理に勿體振るのは愚の骨頂である。かう云ふ譯で昔吾人の先祖の時代に、國家の爲めとか社會の爲めとか云つたのは、實は國家社會の極く小部分たる特殊階級の爲めなのであつて、其他の一般民衆は唯だ是等特殊階級が樂みあぐんだ福利のケチなお裾分けや、僅かばかりの落ちこぼれを有難く頂戴して厚恩に感泣して居た、けの話だ。

かう云ふ土臺の上に築き上げられた既存の風俗や習慣がどれ程自然であり、又どの位一般公衆の福利と一致するかは想像に難くは無い。のみならず此人間の生活狀態其者は過去數十年來驚くべき進化發達を遂げて殆んど根底から改造され、面目を一新しようとして居るに於ておやだ。此新しい生活に伴うて自然に生れた新しいそして健全な思想觀念から見れば、勞働團體が何時でも必要に應じて雇主たる資本家の事業に干渉する事は格別不思議でも無ければ不穩當でも無い。正邪曲直は唯だ社會生活の便宜上設けた標準であつて、其根底たる社會生活とは是に伴ふ思想見解の進化に隨つて自由に變更する事が出来る。挑戰的雇主同盟の思想や頑迷傳統道學の見解は全然科學的根據を缺き、時代の進運に伴は無い我利々々亡者や天保錢哲學の中毒症狀である。是等こそ既に夙つくの昔にお葬式を濟した專制政治や奴隸經濟の骸骨を擔ぎ廻る時代に逆行した本當の危險思想である。

正義・權利唯一の根據は社會全般の福利であつて是以外何者の存在をも認め無いのが近代の科學である。然らば資本家が既得の權利だと主張する所の者は果してどれだけ社會全般の福利と相一致するか。過去の歴史は權利の存在を只だ權力の平衡點に見出した。權利は其時代々々にあつた權力階級間の闘技に依つて決定されたのだから、權利と正義とは必ずしも一致しなかつたのである。社

會の各階級は各自が持つてゐる權力の質量に比例して自己に利益の權利を要求設定する事が出来た。斯様な過去の習慣や權利を土臺として作り出された道德や法律は、時勢の進行變遷に依つてドンドン不適當な寧ろ有害な制度になつてしまふ。それだから吾人は決して新しい者が悉く良いと云へないと同時に、既存の制度が何等一定不動の正義公益の標準にも指針にもならないと云ふ事を明かに了解しなければならぬ。そして此見解から見れば、假令資本階級の思想や其労働者に對する處置行動は決して悉く不當では無いとしても、彼等が要求主張する權利は新興の労働團體が要求主張する權利に比して——縦しや後者はまだ傳統道德や法律の承認後援は無くも——其れが社會全般の福利と一致する程度に於ては別に優つて居ると云へ無いのである。

既存の法律や習慣は決して絶對の正義を表示する者でも無ければ、又最高の道德思想の體現でも無い。假令吾人は社會の秩序保全の爲め努めて過去の制度組織を尊重しなければならぬとしても、同時に又是等を時代の變化と共に生きて解釋適用し、且活用の餘裕の無い者は出来るだけ早く破壊改造して、時勢の進運と社會大多數の人間の福利に添はなければならぬ。是が即ち最も健全な社會思想であつて、是に依るのが一番賢明な社會政策である。

第二十節 愚かなる專斷的抑壓策

兎に角労働團體は生れて來た。そして實在として、社會の一團否一制度として、特殊階級の生存競争機關として益々成長して居る。此集團現象は雇主階級や他の傳統制度の代表員等が畫策する治療法でうまく根治する事が出来るだらうか。

種々の利害關係に連結されて成り立つ集團や階級の寄合ひ世帯たる此社會（此理論は何れ社會原論を著はして詳しく説明する積りである）に於て、一階級は他の或階級を其發生原因や生存理由の如何に頓着無く自分の思ふがままに活殺改變せる事が出来ようか。是等集團や階級の因て生じた根源に手入れしずには發生物だけを處理して片附ける事が出来るか——例へば近代發生の労働團體の様な者を。是は社會に實在する一種の階級現象の發現であつて、因つて來る源はチャンと解つて居るのだ。此労働團體に向つて吾人は『馬鹿共め解散しろッ——ワイ々々寄り集つて假りにも御主人様の手向ひするなどは生意氣千萬な奴等だ。チャンと一人々々に分れて仕事の相談に來へ』と命令したり、『同盟罷業などだけ決して許さない。お前達には勝手氣儘に仕事を止めたり、他人の仕事を妨

害したりする権利は無いぞ』と叱り付けて抑へて行く事が出来るだらうか。

數十の元素が無数の活生體を形成して野山に爆發する春の芽生えを金と力で吹き消す事が出来るならば、資本階級の抑壓策は正しく成功するであらう。大に不満のある多數の人間が共鳴して起す活動は此不平不満其者が鎮定恢復する迄は決して命令や小言や壓迫で治まる者では無い。それでは根本的に彼等の頭を改造して、有産階級や上流特權階級の見解と同じ様な思想觀念を彼等に注ぎ込む事が出来るだらうか。外國では數世紀前迄、又我が國では五六十年前迄はそれに近い仕事は何んとか間に合つて居た。強制抑壓と強制感化で子供の時から習慣的に民衆の頭を鑄型に押し込み、丁度牛馬の其れのように痴鈍に且機械的にたゞき上げるのである。が併し文化が進んで萬民悉く多少の自覺と自負が具はつた、そして時々刻々其れが益々發展しつゝある此二十世紀の文化の中心に立つて、人頭改鑄の模型などを假令誰れが振り廻して見てももう其れを有難く拜受する者は居ない。

労働團體や労働運動が或る特別階級の頭から絞ほり出す智慧の力で制御され、勝手に改造變更されるかどうかは唯だ一つの前提如何に依つて決まる。では其前提とは何か。『若し労働運動が現存の社會・政治・經濟・法律・道德狀態の根本的缺陷に起因して發生したのでは無く、唯だ小數狡猾不逞の

徒等が煽動に因るか、又は空虚愚昧な哲學思想や輕佻浮薄の社會觀などに誤られて偶發した變態現象であるならば』と云ふ事である。若しさうであるならば其專壓的統制や任意改造法も左程六づかしくは無い。が併し若し此運動が過去と現在の實生活上に發生し、其れ等生活狀態に因て自然形成された思想や觀念に基いて居るならば——更に解り易く云へば、若し此運動が現在の政治・法律・經濟・社會制度に刺戟されて是等特種階級が自分の日常生活問題を解決する爲め餘儀無く取る至つた手段であつて、彼等が生存競争の必要に驅られた努力の表現であるならば、是を唯だ法律や道德律の支配に依つて變更統制し様とするのは甚だしき見當違ひである。斯様の事情に因つて發生したのであれば労働運動は現存の社會制度・經濟制度・及び是に伴ふ傳統觀念の反動として發生した避くべからざる自然の產物である。そして此根本制度や觀念が存續する限りは吾人が是を好かうが好くまいがそんな事にはお構ひ無しに労働運動もやはり存續すべき運命を持つて居るのだ。

それだから根本原因を改變せず労働運動だけを變更又は撲滅し様としても、其れは何の効能も無い。無理に專斷的抑壓を加へれば一時は姿を隠した様に見えても、其れは又やがて何等か新しい形式を採つて現はれ出るばかりだ。そして其新たに迸出する鬱積した毒瓦斯は以前に倍した威力を發揚

して慘害を逞しうするのが普通である。當り前の勞働運動は現在の社會制度・經濟制度に伴ふ自然の發生物であつて決して危険思想では無い。併し此自然の社會力を專斷的に抑壓すれば、今度は本當に悪化して浮佻なる社會主義や盲目的無政府主義に接近する傾向を帯びる危険は充分あると云ふ事を心得て居なければならぬ。又それ等の罅隙は本物の社會主義・無政府主義に、以て乗すべき最好機會を供給することになる。是が爲政者たる者の最も注意しなければならぬ點である。

第二十一節 資本思想の進化

有産階級は覺醒して強大な雇主同盟を作り、新興の勞働團體と對峙した。併し此覺醒はまだ本者では無く、唯だ健全な最後の覺醒に向つて進む一階梯に過ぎなかつたのである。雇主同盟の効果は彼等が初め想像した様にさう簡單容易に實現さるべき者では無かつた。

寶の山の鍵を握り偉大の權力を後ろ楯とする資本階級の猛者連は、大同盟を作つて一齊に勞働團體の集合交渉を拒絶しさへすれば、其れで問題は自然解決すると固く信じて立つたのである。が併し愈々此運動を開始して見れば直ぐ其れは大きな見當違ひであつた事が解つた。勞働團體は彼等が想

像した様に砂上の建物では無く、大層強い根を現社會・經濟生活の地盤に深く踏み込んで居て、是を退治するには莫大の費用が掛るばかりでなく、とても根絶やし出来る見込は無ささうだと悟つたのである。そこで雇主階級も二派に分裂した。一つは近視眼黨であつて、何んでも手取早く丸め込んで自分の懐さへ痛まなければ其れで結構だと極め込んだ。其名案と云ふのは其日暮しにチビチヂと勞働團體の要求を容れ、其度毎に勘定書は全部社會公衆の負擔に廻して自分は相變らずうまい汗を吸ひ、知らん顔をして口端を拭つて居様と云ふのだ。そこで物價騰貴・生活難と云ふ魔鳥が益々羽根を廣げて高翔する。是が即ち「雇主協調同盟」と云ふ奴である。名前ばかり『勞資協調』でもこんなのに出られたら一般消費者こそ良い面の皮である。それだからこんな奴には勞資協調なんど云ふ稱號を許可する譯には行かない——雇主協調で充分だ。

も一つの方は少しも勇氣を挫かず、頑強に初信を貫徹し様と決心した剛の者である。そして戦争は何うしても一時益々激烈になり、解決は兎に角永引く者と腰を据ゑて取り掛つた。是を『雇主戰鬥同盟』と呼んで置かう。

雇主協調同盟は防禦同盟である。そして唯だ自分等の事業と直接關係のある勞働團體に對してだ

け頻りに防禦策を講じ、おまけに其れ等労働團體とうまく結託して消費者たる一般公衆の懐から利益を吸ひ取る戦略に耽つて居る。即ち此争議の勘定書は何時でも大部分第三者たる一般民衆が支拂ふのであるから、彼等はつまり兩頭の蛇で妙な獨占事業を經營して居る譯だ。

次に雇主戦闘同盟は率直に労働團體撲滅策に苦心して居るのであるが、併し實地經驗の結果意外の障碍物に出會つて不本意ながら中途から其性質が著しく變つてしまつた。彼等は若し労働團體との戦争に勝たうと思へば先づ自分等が互に強度な内部の統制に服従しなければならぬと云ふ事を見出したのである。元々彼等は極端な自由主義を遂行し様と企てたのであつたが、先づ自分等の個人的自由を拘束削減してからで無ければ團體的對抗運動は成功しないと悟つた。自由を獲得し所持するには必ずや先づ自己の屬する社會團體の統制に服従し、そして協力發展の精神を養はなければならぬと感づいたのである。是は彼等が元來の目的とは全然相容れない觀念であつて、彼等はなぜ労働者があんなに結束して共同一致の行動を取るかと云ふ意味も茲に至つて多少解つて來た。のみならず雇主等は若し本當に秩序を立つて労働團體と戦ふには唯だ經濟界だけに立廻つたのではとても大した成功は得られないと云ふ事も學んだ。そこで彼等は政治的・社會的現象即ち一般社會の福利

増進の法則にも注目する様になり、労働運動の因つて生ずる根源に立ち入つて調査研究を始めた。

すると今度は労働問題は始め彼等が考へた様な薄つべらなお祭り騒ぎでは無く、是には深い根源があり、此根源から療治に取り掛らなければとても満足な結果は得られ無いと解つた。つまり社會觀念の覺醒である。それから彼等は労働者の福利事業を色々考案し初めた。工場の衛生設備や安全装置の改良・労働者損害賠償制度・失業救済・教育事業・住宅供給・娯樂設備等色々の考案が着々實施される様になつた。

是等種々の社會事業の實行は自然雇主等の自己教育になつて、益々やれば益々悟り、彼等の社會觀は頗る健全に建設的發達を遂げて、最初持つて居た純なる挑戰的態度は茲に至つて非常に緩和されてしまつたのである。彼等は若し労働團體を撲滅し様と思へば先づ労働團體が要求して居るだけの者は是を労働者等に與へなければならぬと知つた。そして此目的を遂行するには物質と精神と兩方面から勞資互に接近融和して階級思想發生の根源を絶ち、そして労働團體存在の理由を覆さなければだめであると覺り初めた。

以上は則ち先進諸國の労働運動發展史上に書かれた最近の活劇である。我が資本階級も以て他山

の石とするに足る者であらう。

第二十二節 社會觀念の發達

總て世の中の事は講義や忠告や説法だけで治まる者では無い。碌々飯も食はずに置いて子供に
行儀作法の心得を説けば、彼者は其説法の聲の下からワイ々々騒ぎ立て、濟度すべからざる餓死と
なる。傳統の盲目宗教や暗抜け道學のやり方は多くは此手で喰ふのだから何の効能も御利益もあら
う筈が無い。

勞働團體や勞働運動に雇主側が必要條項を満たさなかつた爲めに自然發生した症狀である。そして
最初各國で盛んに起つた雇主等の個人主義的反勞働運動も、漸く此病根に氣が附いて近來著しく其
形式を變へて來た。自然の秩序と云ふ絶對觀や、既得の權利神聖觀や、新しい勞働運動は不自然で不
徳で危険であると云ふ攻撃なんかはそろ／＼聲を潜め、其代りに公平な待遇・勞資協調・建設的社會
政策などと云ふ聲が追々高まつて、年末賞與・利益配當・養老年給・工場協同管理云々と色々の進歩的
制度が實施され始めた。そして其れ等の制度組織が良く適用されてる所には悶着も大に減つて來た

のである。

雇主同盟は何んと云つても實は強大な實力を持つて居る。勞働團體と對抗しても確かに充分餘力
を存して何等致命的傷害は受け無いのである。そして若し決意して何んにも構はず貫行すれば、そ
れは又勞働團體を一時支離滅裂の悲境に沈淪させる事が出来る可能性を持つて居る。雇主の方は互
に結束して假令半年や一年の間丸切り工場を閉ぢてしまつても差し當り衣食住に迷ふ様の心配は無
いが、勞働團體の積立金や勞働者等の貯金などは其れに比べれば殆んど數に入らぬ。そして掛け聲だ
けはサポタージだとか汎同盟罷業なんかんと氣勢を付けて居ても、若し本當に工場を皆閉されば
數ヶ月ならずして路頭に迷ひ出すのが大多數である。又今の状態ではまだ各國とも團體加入員より
は非團體員勞働者の方が數倍乃至十數倍の數を持つて居るから、若し雇主同盟に一旦廣汎な黒表制
度を實施されば、勞働團體は大部分立ち行かなくなる。兎に角一年も掛れば半熟練職工位は何んと
か仕込めるから、既存の熟練職工を大部分解雇してもやれぬ事は無い。其れだから若し資本側も大
に意を決して自分達が益々儲けるのを一時我慢して中止し、大舉して宣戰布告をやれば其れは勞働
團體に取つては實にゆゑしき大事である。

が併し前節に説いた様に、一つには雇主間の個人主義や利己主義の爲め、も一つは彼等も經驗上労働運動の因て起る根源を學んだので、近來の傾向は幸にも資本側が益々社會化して來て協調的態度に出たのは社會全般の福利の爲め誠に喜ぶべき現象である。つまり彼等の間に追々社會觀念が發達して、假令一時労働團體を撲滅して見た所で、労働階級が根本的に不平不満を懷いて居る限り、復何等かの形式で悶着の芽を吹き出し、勞資の衝突は到底絶える事無く、或は益々惡化して社會主義や無政府主義的になれば愈々困つた事になると悟つたのである。

社會主義や無政府主義が何等完全な社會全般の幸福を齎すべき魔法では無く、却つて一層多くの貧困と罪惡を生じ、彼等の理想や宣言の綱領とは正反對に大多數の民衆は益々疲弊して社會の進歩も幸福の増進も實現出來る見込の無い事は、直面目に研究すれば誰にも見當はつくのである。唯だ急激性の感情家や、空々漠々たる哲人的グレ頭や、理想にばかり走つて一途に教義に心酔した信仰家・頭が至極單純で面倒な建設的工夫は出來ず、手取り早い荒療治で試して見様と云ふ無茶苦茶な投機連・相憎逆境にばかり出會つてツムチの曲つてしまつた不遇先生・横著の懶け性か本物の低能でとても激烈な生存競争には堪えられず、と云つて懷中は何時也无一物でどうせ何ちらに轉んで見て

も損しつこ無しと度胸を据ゑた寄生蟲・譯も解らぬ薄つべら頭が柄にも無い際物をやつて飯の種子にし様と云ふ當世學者ゴロ・是等の先生達の説法に誤られた經驗の浅い青年達——と云つた様な人達以外の常人連には學問や經驗の深淺廣狭に拘はらずとても賛成出來る手段や方法では無い。其れだから其書いた物や話だけは、興奮調や悲痛諷刺的言辭に満ちて面白いから娛樂材料に讀んだり聴いたりするが、イザ實行と云ふ段になれば幾ら困つた人間でもなか／＼賛成しないので、社會主義者や無政府主義者は自分で殉教者になり済すか、又は自ら『天才』だなんかんと大層高く構へて、一般民衆の痴鈍さ愚昧さ加減を嘲笑する程な都合の良い自欺的解釋に満足し、其れ以上更に立入つて一層深く研究し様とはしないのである。

が併し人間の頭は大部分其實生活の環境に支配されるのだから、若し階級の差別懸隔が益々著しくなり社會的病弊が愈々堆積すれば、今は可なり穩健着實な者でも追々不健全な思想に感化されて險惡な觀念を持つ様になる。其れだから爲政者や資本階級は豫め最も慎重の態度で考へ、眞面目に適當の改良策を講じなければならぬ。

労働者側も亦同様である。無闇に輕舉妄動して資本側と事を構へ、衝突を招くだけでは實質に於

て何等語るに足る向上も發展も出来ない。既に述べた通り唯だ資本階級にぶつゝかつて怒らせるだけでは却つて自分達が損をするのである。相當の理由の下に絶えず正々堂々たる態度を持して交渉刺戟し、雇主側の事業の實狀や輿論の趨勢等にも充分注意を拂つて、合理的な進歩發展策を取る事が最も肝要である。

社會現象は各種の利害關係及び是等に結合された生活團體や階級間の競争・衝突と是に次いで起る協力の産物であつて、社會生活は此活劇の廻り燈籠である。智慧の淺い、經驗の少い、そして近視眼の人間は自分一人の利益にばかり熱中し過ぎて外の事物が見えなくなる。次にも少し解つた頭の持主は自分の屬する特別團體や階級の利害は大に自己の利害と相一致すると云ふ事を悟つて來る。そして最後にもつと大きく眼が覺めた者即ち社會的自覺が明確に出た人間は、是等特殊階級の利害は又社會全體の利害と頗る一致すると云ふ事を發見するのである。第一の部類の人間は無闇に怒ばつて他人とは衝突仕通しである。即ち個人主義の固まりであつて是を反社會性と呼び、或る種の犯罪者や無政府主義者等の大部分は此お仲間である。第二の部類は階級戦が何より尊い者の様に心得て其れ等各階級が又如何に互に密接の利害關係を持つて居るかと云ふ事を知らないのだ。古い型

の社會主義者等は此階級戦萬能信者の本家株である。最後の者は社會全般の福利と云ふ事を心に置いて、總て行爲の標準を此土臺の上に立て、全社會の福利増進に向つて一番多く貢獻する方法が一番良いのだと極める。此目的に適合する様に各個人や各階級の行動を支配するのが廣義の社會統制であつて、個人統制よりも階級統制よりも一番上位に來るのである。

併し世の中の事は絶えず變化する——慾望・必要事物・生活狀態・個人や階級間の關係・一切の環境・社會福利の性質。問題其者等が皆時々刻々進化する。そして折角法律や慣習や道德制度で設定した社會福利の標準も暫時にして不適當になり、長年月を経れば大部分は全然役に立たなくなる。即ち既定の社會統制法は片輪になつたり病氣に罹つたりして、却つて社會の福利と進歩を阻害する様になる。にも拘はらず其れ等傳統的廢物を其まゝ存続し様とすれば、何うしても丸く働かないから反抗運動や破壊運動が起り、舊制は遠からず覆へさられて新制度が生れ出る。それが又暫時過ぎると同じく古くなり、其古い制度で利を得る者は個人主義や利己主義を發揮して固執するから復々無用の傳統制度が溜る。こんな喜劇悲劇が繰り返し々々々々行はれて其間に社會は進歩する。そして交通が開け教育が進めば益々民衆の社會的自覺と社會觀念が發達して、全局の利害が見える様にな

るのだ。

資本家が本當に社會的に覺醒して労働階級の利益をも眞面目に考へ、其觀念の上に築き上げられた誠實の協調策を提げて立てば、労働者側も必ず納得して紊りに事を構へはしない。此邊の誠意がまだ缺けてる爲めか、又は誠意があつても其れが或る事情の爲めに労働側に徹底し無い爲に悶着が起るのである。労働階級も冷静に資本側の主張説明に耳を貸し、又一般消費者の利害をも考慮して適當な要求をするならば是を貫徹するのは左程六つかしくは無い。現に外國で最も發達した労働團體などは戦争終結後諸物價が下落し工業の經營も困難になつたのを見て、雇主側から要求されない先に資銀を引下げて他の物價と事業の實狀に適合した例がある。若し労働階級に階級思想以外更に一段進んで本當の社會的自覺と觀念が發達すれば、誠意ある資本側との協調は決して困難では無いのだ。勞資何れかの一方又は兩方に利己主義や階級思想ばかり強くて社會觀念が發達しない限りは、利益分配法・年末賞與法・年金法・工場共同管理制・其他何んな名案を提出しても、内實の變化が其名と伴はないから到底それ等制度の運用がうまく行く筈が無い。かうした勞資雙方の進歩に依つて、現今最も解決が困難な一社會問題たる労働問題も大部分治療する事が出来る。

併し人間性を凝視する時に吾人は決して永久の樂觀を許されない。假令幸にして將來勞資の協調が非常に圓滿に進行する様になつても、やはり労働團體は絶えず労働階級の後楯として存在の必要があり、又必ず存続するであらう。のみならず假令社會主義の世の中になつても、労働團體が社會主義者等の主張する様に絶體不必要になるかどうかは疑問である。

以上二章の研究で労働問題の意味・性質・趨勢等が解つた。併し既に度々繰り返した通り、社會問題は決して部分的の診斷や治療法で完全な解決が出来る者でないと云ふ事を忘れてはならない。労働問題は唯だ簡單な労働と資本と云ふ確然分離した二種の利害勢力の衝突争議だけでは無い。是と關聯して同時に治療しなければならぬ幾十の病症が他にもあるので、それ等と相並んで治療されてこそ初めて労働階級の生活程度向上の目的も達せられ、勞資相互の融和協調も計られるのである。

『社會問題』と云へば直ぐに労働問題の異名だと思ひ、『思想問題』と呼ばば其れは社會主義の事だと考へるなどは實に皮相の見解である。其れだから茲に是等の問題を『病める社會』研究の一部分として特に他の諸問題よりも一層詳細に論述して、世人が是に關する誤解を解き更に廣汎な觀

察力と一層賢明な理解を得べき事を希望するのである。

我が國は今後益々工業國になるだらう。さうならなければ食つて行けない。そして商工業が發達すればする程益々勞資問題は殖ゑるから、とても從來の農業本位時代の様に天下泰平では通れ無い。殊に資本階級や官僚政治家等が居眠りして居る間に一般民衆の知識と自覺が急速の進歩發展を遂げつゝあるのは最も注目し値する。過去十年間に於ける我が國民の社會的覺醒は實に驚くべき者がある（川邊著英文『日本の新聞と政治』参照）。そして今後の十年は更に大なる變化を示すだらう。資本階級は今から充分其覺悟で掛り、爲政者は豫め是に處する道を講じて、最も進歩的な社會政策を施さなければ、悶着は必ず増すばかりであつて悲惨な外國の經驗の覆轍を履まなければなるまい。

第十一章 結論——社會觀の改造

以上各章を通じて述べた所に依て如何に社會問題は複雑で、又是に反應する人間行爲は微妙の者であるかと解つた。そして社會生活の進化に伴ふ副産物たる貧困・犯罪・不道德・家庭の不調和・階級衝突・其他あらゆる病弊は、決して哲學の何々主義や何々觀——社會主義や無政府主義——其他何でも主義とか教義とか名の附く様の一本鎗では、假令それが何んなに名鎗であつても到底急所を突き止める事は出来ないといつた。（第七章第六節及七節参照）之等の連中は一體懶さいのだ。餘り骨を折らずに手つ取り早く一回限りの荒療治か又は不老不死の仙藥と云つた類の治療法で、あらゆる社會の病原を永遠無窮に根絶して了へると信じて居る。少くもさう云つて喇叭を吹いて居る。

けれども有難屋連中なら兎に角、正氣の人間が幾ら海山を探し廻つたとて、萬病根治の一服劑なんか見附かる譯がない。人間が生きて居る限り何か病氣は付き物だ。吾人は唯なるべくそれが出来ない様に不斷注意し、又出たと知つたら早速科學的治療法に頼る外は無い——最早神水や護符の一服劑なんかと跋扈する時代ではないのだから。

が併し、一方を見れば鑛物學・植物學・動物學・化學・生理學・醫學・工學等の自然科学の進歩に依りて、益々廣大な自然現象が人為的に統制されつゝある。衛生法と治療法が發達すれば人體の病氣は減るばかりで、若し出ても容易に治せる様になる。之と同様に歴史學・人類學・政治學・經濟學・心理學・社會學等の所謂社會科學が益々發達すれば、社會現象は益々廣く人為的に統制が出来る。そして社會生活の病症たる社會問題は愈々減り、又現はれても直ちに適當な療治が取れる様になる。即ち科學の力に依りて、先づ病源を探究して豫め是が發生を防止し、若し出れば早速治療を加へると云ふのが一番確かな救濟法だ。

社會科學は自然科学に比べればまだ齡が若い。後者は四百歳だが前者は僅かに百歳だ。のみならず社會現象は其實験や比較研究が一層困難なのでまだ至つて幼稚の時代にあるが、それでももう可なり役に立つて來た。そして過去十數年來大に覺醒し初めた熱心な學者達の日夜撓まぬ研鑽に依りて益々進歩發達して居る。十數年前の社會學や心理學・政治學・經濟學などは最早今日とは似ても付かない物になつて了つた。殊に最近三四年間に於ける社會學と心理學の進歩は著しいので、此間ぼんやり睡つて居た先生達などはもう生きた學問を語る資格は無い。宗教や哲學は古くつても融通す

るし、商店なら老舗と云つて信用されるが、科學者の古手は腐つた鯉同様だ。まあ幾ら名著でも現代の學界では大概十年一昔を期として古典招魂社に其英靈を奉祀する外道は無い。

科學は其仕事が地味だ。はり扇一薄片手に振り冠つて『抑々人生究竟の目的は——』『須らく高所より大觀すべし』『孰と宇内の形勢を惟みるに——』『なんかんと子供騙しのから景氣を附ける譯には行かない。絶えずコチ／＼と微細な點に涉つて理論と實際とが何う一致するかを研究し、歩一歩、刻一刻、益々新しい境域に進み、愈々有効な原則の發見に努めるのが其務めだ。豫言や投機はやまは利かない。そして發見した原則を一々その適所に應用して社會を一層住みよい所にし、人生を益々價值ある者にするのが其希望だ。

社會學は決して宗教や哲學や主義や教義を排斥しはしない。寧ろ彼等を一々科學的眼光の下に分解研究して其効用を確實に認めて居る。それだから彼等に對し社會統制機關の一として立派な地位を與へて置く。社會學は科學の發達だけで人生が満足出來ると信する程盲目ではない。宗教・哲學・文學・美術・音樂・傳説・習慣・偉人・新聞雜誌・其他種々の統制機關が、それ／＼皆違つた獨特の働きをしてる事を認め、そして其れ等を一々分析研究するのである。然しながら又、非科學的統制機關の

法外も無い要求を拒絶する。彼等は決して總ての人生問題社會問題の解決法でもなければ一番貴い手段でも無い。又彼等の或者は近來頻りに科學的にならうと焦つて居るが、若し其れが成功すれば則ち本籍を移して社會科學の養子になつて了つたので、大概心理學か社會學に還俗する。

殊に所謂倫理學や道德學は世界中何處へ行つても今や殆んど自ら生活の迷路に立つて大に煩悶して居る。傳統哲學のやり方では全然もう意味を爲さなくなつて來たので、その枯れ木の根本の方から何か新しい生命のある芽生えを得たいと苦心焦慮——それは又大した者た。——社會哲學——社會道德——社會倫理——社會と人生——なんかんと新しい芽がむくく吹き出す。そして頻りに社會科學の見解を少々ばかりソツト御採用なさるが、幾ら社會と云ふ看板を其の枝にぶら下げて見ても肝心の根本が元の奴だから無理がある。改造と迄は行かず一寸變種位の所だ。何うも徹底しきれないでヌラリクラリと變な講釋を試して見て居る。假令枯木に花咲く春は來ずとも、世に立派な哲學の科學は出るかも知れない。名前は宗教でも——倫理でも——哲學でも一向差支ないから、其物の見方即研究態度が根本的に徹底すればよいのである。是即ち著者が本書の序に於て、本書を應用倫理學教科書と認めらるべき大度量を世の先覺者諸氏に要求した譯である。生きた倫理學は則ち社會

學だ。國際道德は國際間の人間行爲を社會學的に觀察し、國民道德は國內の人間行爲を社會學的に觀察する。斯くあつてこそ道德學の價值が一層廣く認められ又實用が殖えて來るのである。

哲學者が一方に於て、科學の力は實に微弱であつて、とても何等人生の秘密を解く事は出來ないなど、超越主義を極め込むかと思へば、其の同じ舌で直ちに——哲學は科學の科學である——なんかんと定義を下して、頻りに自分等の研究が科學的立場を持つて居るかの如くに信じさせ様と骨を折るのを見れば、それでもう大概彼等の苦境が察せられる。

社會は實に複雑だ——が、もとく人間の造つ者だから又人間に依て改良が出来る。そこに希望があり、そこに生命が宿る。然し此改良は急進革命主義や投機的抽象哲學論の様に馬鹿に呑氣な樂觀主義を許さない。決してそんな簡單にチヨイと改革が出来る者ではない。と云つて又其業の容易で無いのに意氣沮喪し、却て棄て鉢式破壊方針の妖夢に憧憬れ、或は無爲偷安の白紙主義に墮落し、又は厭世觀に自滅するが如きは生存競争の憐むべき落伍者輩のみである。吾人は科學的基礎の上に飽くまで堅實な改革法を取り、倦まず撓まず社會進化の潮流に沿うて健闘猛進しなければならぬ。茲に即ち進歩があり、人生の楽しみも亦其中にある。

總て古い社會觀は社會組織を停滯してゐる者と考へた。そして昔の社會は實際其進歩が極めて遅かつたから其れで何とか間に合つてた。進歩變化が緩慢なら、常識や普通の經驗から得た大ざつばな知識でそろ／＼改良したり、又正確な科學的の原則などは解らないが兎に角當るも八卦當らぬも八卦と云つた調子で、色々の方法を片端から試して居る中には何れか盲目當りにぶつ付かる——と云ふ筆法でやつて居たのだ。勿論時間と勞力を浪費した事は實に夥しい。そして能率は至て低かつた。それだから進歩が遅かつたのである。

然し十六世紀頃からそろ／＼人智が進み始め、隨て社會進化の速度が益加つて來たので合理的統制の必要が愈々殖えて來た。十八世紀以後自然科學の成功は實に急速偉大なものであつた。そこで社會方面でも傳統の憶說的宗教——哲學——乃至道德法則に不満を感ずる者が殖えて來た。自然科學が合理的に自然現象を統制しつゝある様に社會現象も統制出來ない筈は無いと考へ始めたのである。

昔の社會統制は少數者の政治的又は宗教的權力で人間の行爲を命令したり又禁止したりするのが大部分であつた。是を**權力統制**と呼んで置かう。その武器を以て一部の強者が多數民を專斷的暴力

の制裁の下に支配したのである。そして民衆は其命するが儘に或は動き或は止ると云ふのが其常態であつた。斯様な社會生活では其統制がうまく成功するや否やは寧ろ投機的である。若し一つの命令が思ふ様の効果を奏さなければ又違つた命令を發して試る。幾度も々々變へて行く間にどれか役に立つ——と云ふのが其政策である。現今でさへも無智な立法者は矢張り此筆法で一國の大法を作つて居る。そして自分にさへ良いか悪いか些つとも見當の附かない者を國家權力の下に一般民衆に強制するのである。

も一つ廣く用ひられた方法は常識統制だ。併し常識は或程度以外は無力である。それは各個人に至つて狭い經驗から得た大ザツパな理論である。一體吾人は社會に住んで居るのだから社會の實體が何であるか知つてゐると思ふ。且社會の法則は實生活の經驗から確實に習得したと考へる傾がある。これが抑々大きな間違の本である。丁度古代の人間が自分は自然界に住んで居るのだから自然現象が何だかは良く知つてゐると思つたのと同様だ。總て未開の時代には宇宙のあらゆる現象を此筆法で解釋したから解る筈はなかつたのである。個人の社會的經驗は常に極めて小さい者だ。第一世界人類全般に通ずる經驗が解らないばかりでなく、自分の國の事でもさへもホンの一部の社會しか知らな

い。のみならず各人皆其性癖や嗜好や必要が違ふから自然注意の拂ひ所も違ふ。隨て假令眼の當り見ても自分がその事に趣味を持たず必要を感じなければ些つとも印象を與へないから何の經驗にもならない。斯様に個人の經驗と云ふものは主觀的に極く狭く限られて居る。それだから假令幾ら廣く世渡りをした積りでも其社會現象に對する知識は實に微弱な者だ。勿論各個人は此方法から相當に生活の原則を得て居る。然しそれは唯だ彼等が生活して居れると云ふ限度にあるのだ。當る事より當らない判斷の方が多し、又もつと有効に出来る事も遙かに能力以下にして居る。若し彼れが科學的に行ふならば其能率はまだ幾倍になるか解らないものを。

も一つ常識經驗の缺點は、人は大概事物を見る時に著しく目立つた物ばかり取つてそれを其社會の一般標準とする傾のある事だ。新聞通信員・文學者・旅行家などが時々飛んでもない病的現象を拾ひ集めて、是を恰も代表的事物の様に報告するのは誰でも氣付く所である。之が爲に他の國や他の民族の政治・宗教・風俗・習慣等が非常に誤解される事が多い。著者は外遊中屢々此例に出會ひ、外國人が日本に關する知識の餘りに奇抜な事に何時も驚かされない譯には行かなかつた。是は一度か二度日本に來た事のある自稱日本通の水兵・旅行家・宣教師などが飛んでもない常識解釋を傳へ廣め

るからだ。社會現象は何事でも其一事だけ見ずに、必ず其特別現象が他の總ての社會現象又は其接近して諸現象と關連して、即ち全體の社會から判斷して何んな地位を占めてるかと觀察しなければならぬ。日本の婦人が他人の前で平氣で裸體を見せると云つて是を淫逸の特徴と認め、長崎邊の貧民の妻や娘が外國の水兵に淫賣をすると之を日本婦人全體の共通道德標準と解して居る者が澤山ある。是は外人側の例だが其れに負けないのが日本の外國通の中にも澤山居るから餘り文句も云へない。社會學者でも古い先生達は大概此の流義だつた。ハーバート、スペンサーなどは此例だ。それだから觀察を正確にするには部分的獨立の判斷を下さず必ず綜合的解釋をする必要がある。以上の諸例と反して科學的統制方法は一人や二人の經驗に基かず、廣く萬人共通の原則を見附けるのである。同様の状態の下に起つた同じ結果や違つた結果を澤山集めて研究する。之等の材料の考察から社會生成の法則を見出す。そして社會理論は此社會生成の法則のあらゆる因果關係を究めるのである。それだから科學的社會理論は決して單一原因論ではなく、必ず綜合原因説だ。そこで社會學は研究の原則を次の様に教へる。

『あらゆる個人又は社會現象の原因は、決して單一な他の個人又は社會現象ではなく、必ず個人

及び社會現象の混成物である。』

古い社會學は個人と云ふ者を全然閉却して、何事も社會々々と社會の一點張りで、個人は唯其機械的構成分子である様に説いた。そして社會現象の原因は個人には無く、全然他の社會現象のみだとした。佛蘭西流は一體に皆此傾きである。が是は非常に間違つてゐる。社會現象の本を爲すのは個人であつて、其個人の特徴に依ては同じ社會理論も適用上餘程の相違を生ずる。個人が先天的に持つて居る特徴と、生れた瞬間から得た總ての經驗の綜合體なる人格は、各個人の顔が違ふ通りに皆それ／＼違ふのであるから、『サア是が社會行爲の原則だ——人間性の法則だ』と決め込んで取かゝつても、いざ實地に應用して幾千萬の人間の社會行爲を解釋しようとする時には、一人毎に其反應の狀態に多少の相違を見るのである。そこで最も科學的な社會現象の研究法は全體に通ずる概則を生臺として、其上各事件毎に個人の人格の構成要素を長い前の過去に溯つて、詳しく調べるのである。團體の研究も同様に各團體の特徴を詳しく調べなければならぬ。總て社會問題の解釋が六づかしいのは、其れを説明すべき材料が餘り複雑だからではなく、それを適用すべき個人の人格や團體の經驗特質が複雑で解らないからである。勿論古い先生方の様に社會學は全然個人的の現象には

無關係だと高く構へて居ればそれ迄の話だが、但しそれでは本當の科學的研究は出來ない。何時になつても哲學の様に其足が地面を離れて空中をフラ／＼彷徨つて居る化け物で居なければならぬ。

社會學の理論原則は過去を説明する爲ではない。現代及び將來に涉る社會形成の諸現象を實際研究解釋して、更に精密な法則や結論を見出す爲である。此點に於て社會學は法律哲學・歴史哲學・社會哲學・倫理學・政治哲學などと違ふ。後者は主に定義の研究と抽象的説明である。總て社會哲學の類が過去の材料にばかり屈托して現在を直接調査しないのに反し、社會學及び其他の社會科學は其材料を直接新發見と新出來事に依頼する。そして既に存在して居る理論は、假令それが何んなに立派に見るに惜しい原則であつても、若し新事實の證明が是と抵觸する場合には躊躇せず投棄せよ了ふのである。即ち所謂大原則や理想的法則の辯護保存は是を哲學に任せて置いて、社會科學は新しい實際に活用する法則だけを築き上げながらドシ／＼進んで行く。實驗上近づく事の出來ない物の實在や意義などは哲學者には非常の寶物であるが、社會科學は是を見當違ひとして手を出さない。理論や原則が果して良いか悪いか、正しいか間違つてゐるかは、唯だ社會の實生活に應用して見

て之を極めるのである。

然し實驗は社會科學最後の目的では無く、唯だ其理論を發達させる手段である。眞の目的は、斯く實驗に依て有効を證明した原則を社會の實生活に應用して人間の福利を増す事にある。丁度物理や化學が實驗で正確な法則を發見して其れを工業に應用するのと同様だ。つまり社會科學の目的は社會實際生活を合理的に人為統制する事にあるのである。

社會理論は人間の行爲を以つて先天的内因と環境の刺戟に對する反應であるとし、是等諸種の刺戟と反應の状態を統制する事に依て總ての社會現象を支配する事が出來ると信じて居る。自然現象の統制が遂に今日の工業生産の發展に依て證明されてる通り、社會現象の統制も追々と精確に實生活上に證明される筈だ。人間性の上から見ても社會構成の性質から判斷しても、決して此人爲統制の成功を絶對に不可能ならしむべき障礙物は何處にも見附からない。唯一の障礙物は人間自身に在る。觀的缺陷だ。此主觀的障礙物の大立物は常識解釋の習慣性である。自然科學の範圍だけは常識論者も既に降参したが、社會科學の方はまだとても其處迄行かない。「そんな事は學者の小理窟だ、なかにそんな面倒臭い事を云はないでも自分達はチャンと生きて行けるし、且立派に成功して居るで

はないか』と云ふのが其論旨だ。然しそれだから社會問題が多過ぎて困り、又人間が是以上一層大きな成功の出來る可能性を無駄にしてると云ふ事を悟らないのだ。

も一つある障礙は、人間が傳統道德や宗教思想に囚はれて非科學的感情生活の情性が今でもまだ強過ぎる事である。初めは自然界に對してさへも是を科學的に統制するのは恐れ多いと考へて非常に反抗した者だ。是が爲に幾多の科學者が尊き犠牲となつて居る。丁度今普通人が社會現象に對する態度は、十五六世紀頃の先祖が自然現象に對して持つて居たと同じ位の程度である。哲學者などは今でも自由意思が何うだの、宿命觀が何うだの、人道が何うだのと、人道や自由が社會を離れて存在する様な積りで議論して居る。又社會學などと云ふのは、社會と名前を冠つただけで、其のやゝは矢張萬事抽象木位だ。そんな非科學的の頭から割り出して無茶な慈善事業などをするから低能兒や氣狂ひや犯罪者を殖やす工夫をしたり、乞食や窮貧者を益製造する様に盡力したりするのだ。良い事をしたと思ふのは感情的眼先判斷だけであつて、其實却つて大に非人道的・反社會的の事をして居るのである。社會病弊の排除が六づかしいのは實に此の盲目仕事が多いからだ。プラグマティズムなどは『實際に役立つ立事が一番良いのでそれが即ち善である』なんかんと大層新しい振りを

發揮して居るけれども、それでは何が果して役立つのか其れを見附ける方法さへ些つとも講じて居やしない。それだから一片の常識論に過ぎないのだ。そして常識の當てにならない事は既に説明した通りである。故に彼等の根本法則を借りて云へば「プラグマティズムは實際に役立たないもので、それは即ち善くないもの」と云ふ様な具合になる。哲學は假令「絶対」や「實在」の講釋を止めて、熊公哲學に迄進化發展しても、それが哲學である限り矢つ張り科學にはなれないものか——哲學者焦慮煩悶の場面を斯くまで大仕掛な曲藝に依て見せつけられると、人間の弱點として幾分氣の毒にもなる。

然し以上二つの障害物を何時迄も頭張らして置くのは、つまり社會科學者自身の罪だ。科學は總て實行に依て證明され應用の成功に依て受理されるので、科學者自身が哲學の化け者の様な事ばかり講釋して居る限りは勿論發達も歡迎もされる筈が無い。或種の社會學者などは何時になつても五六十年前の大先祖が始めたいろはを無上の至寶・唯一の學問だと心得てる。ヤレ社會は動的だとか靜的だとか、進歩するとかしないとか、有機體だとか無機體だとか、何の變哲もない事を勿體らしくチビ／＼と教壇の上で小出しにしてばかり居るから常識論者に迄馬鹿にされるし、一般民衆にもあ

きられて了ふのだ。

新規流行は何でも一般民衆に歡迎される様に見えるが、それはホンの一部分の社會現象に就てだけで、少し重大な生活問題になれば人間は何時でも恐ろしく保守的な者だ。新らしい事を馬鹿に恐れる。それだから新らしい事を説く者はそれが何人の頭にも、その取つて代らうとする古い事よりも確かに優れて居ると云ふ事實を證明しなければならぬ。社會科學の理論も是を實地に應用して其優秀な成績を示しさへすれば、假令人間が如何に保守的であつても追々それを受け入れるのである。

も一つ社會科學の發達が遅々として振はない理由がある。それは今の社會科學は折角有効な理論を發見しても其れを應用實行する専門家が少い事だ。つまり工業に於ける技師、醫學に於ける開業醫と云つた類の實行専門家が少いのが何よりの缺點である。理論が抽象的なのは哲學ばかりではない。物理でも化學でも其他どんな科學でも理論と云へば概括的共通的の原則だから勿論抽象的だ。唯それが一は主觀的投機的であり、他は更に客觀的實際的であるだけの違ひである。此抽象的の理論を具體的にするのは則ち理論應用技師が其れを個々の場合に當てはめるのだ。そして科學の理論

は皆實際に基いて作り上げられるのだから、それが良かれ悪かれ皆或程度迄は應用が出来る筈だ。然し理論家が必ずしも適當な應用家ではない。生理學や化學だけ幾ら良く知つて居ても開業醫としては通用しない。病理學を知つて居てもまだいけない。つまり個々の病人を取扱ふ時には、數の少い概括的理論を以て千差萬別の事情を判斷し、丁度適當な處方をしなければならぬのだから、其の判斷力こそ最も大切な資格を成すのだ。社會現象もさうである。一通り根本的理論原則を心得た上に、實地是を應用する練習を経た専門家の養成が最も必要だ。それにも亦各部門に依て、丁度醫者にも色々違つた専門がある様に、特別の専門家が出なければならぬ。犯罪問題専門家、家庭問題専門家、慈善事業専門家、勞働問題専門家と云つた具合に發達するのである。理論の應用が益々盛になれば自然社會科學の價値は世人に認められてドシ／＼實行時代に入る。さうなつてこそ初めて其科學としての進歩發達が自然科學と肩を並べられる望が出て來るのである。

著者は第一に社會原論、第二に社會心理學と順を追うて書くつもりであつたが、我國社會學發達の現状を考へて見れば、どうも初めから混み入つた新しい理論を説いても難解であらうし、且又日本の傳統社會學と混淆される恐があるので、一旦稿を起した社會原論を中止して、全然方針を一

變し、逆に應用の方から説き初めたのである。希くは逆も亦眞なりの實例を示して、本書が聊かたりとも健全な社會學の普及發達に貢獻する事が出来れば著者の以て欣幸とする所である。

書中時に不當不遜の言辭あらば、それは決して高慢粗野の爲でも無く況んや求めて學を街ふのも無い——全く科學の普及と社會の改良に白熱した勢力の餘韻であることを推察の上寛恕せられたい。のみならず又一つには是に依て我が斯の學界の沈滯萎微せる空氣を一新する刺戟劑にしたいのだ——と云ふ衷情も付度せられたい。

臭に入つては其臭を知らずと申すが、幸ひ著者は多年の外遊から歸つたばかりだから、其臭が解り過ぎるので、愚圖々々して居て又其臭に慣れてしまはない中、大急ぎで我學界の爲に苦言を呈するのだ。所謂「新人」「舊人」共に淺學低識一知半解の徒輩が一廉の權威者を氣取り、忍耐と勇氣と氣概と努力を缺いて何等の新研究をも爲さず、我身の襤褸の現はれん事を恐れて只管相尊互敬主義を採り、徒に苟安逸樂を貪つて得々として居る。彼等は屁の様な愚論駄説を恰も崇高深遠到底常人の近づくべからざる神秘的奧傳でもあるかの如くに裝ひ、地位や肩書などを勿體らしく振り廻しながらヤレ國家が何うの政治が何うの、社會が何うで思想が何うだの、人生が何で哲理が何うしたの

と、口から出任せの寢言を並べ立て、有爲多望の青年男女を詐り、善良誠實なる一般民衆を愚弄するに至つては、是實に黙過すべからざる重大な社會問題其物である。

が然し又他方を見れば氣の毒な程の薄給に甘んじて士氣も沮喪せず、苦しい生活の中に學者の威嚴と學問の價値を重んじて、孜孜として終生一日の如く研究を続け、頭は既に霜を戴き雙眼は霞に閉されても、猶良く後輩の指導啓蒙に一身を捧げる高德眞摯な先輩諸氏もある。是等碩學が今日迄の苦心功勞に對しては、多大の敬意を表すると同時に滿腔の誠意を捧げて感謝の辭を呈するのである。唯だ科學は嚴正であつて、個人的考慮の爲に正邪曲直を私する事を許さず、情誼に依て説を緩和調節する餘地を與へない。即ち其人を敬して其學說事業を批判し、以て社會全般の福利に添はなければならぬのである。そして著者は今後益々此軌道に沿うて直行猛進敢て憚らない事を期する。幸に是を諒せられよ。

第十二章 定義

以上十一章を通じて社會生活を縱横無盡に研究したので其性質がはつきり解つた。そこで漸く此研究問題の定義を下す事が出来る。

(一) 社會問題

人間の社會的生活に付き纏ふ困つた病的問題を社會問題と名附ける。

(二) 實際社會學

實際社會學は人間社會生活の生きた合綜的解釋と改良方法を研究する科學である。

病める社會終

正誤表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
四三二	一	一〇〇〇ヤが	一〇〇〇ヤが	四三二	六	千九百十年度	千九百十年度
四五九	四	相違の分子ばかり	相違の分子ばかり	四四四	五	月収千圓以下	年收千圓以下
五九	五	要素をいて居る	要素を缺いて居る	四五二	一三	に。是は	次に。是は
九一	九	●：健康體ダケレドモ	●：健康體ダケレドモ	四六三	一一	及普通労働	又普通労働
一一一	九	公娼制を發して	公娼制を廢して	同	一三	下れぬに	下れぬ様に
一一二	三	益此々の	益々此の	四九二	一九	新しい奴	新しい奴だ
二〇〇	四	漫潤	侵潤	四九四	一	て一般労働團體	て一般労働團體
三八五	五	三二	三三	四九六	九	「労働團體」と「貼紙業部」の間にある。印を	「労働團體」と「貼紙業部」の間にある。印を
三八八	一一	「列舉した三つの」次に	「問題」を挿入	五〇六	三	長時間労働者	長時間労働者
三九一	一〇	人口制限	人口制限	五〇九	一	枉め様とめ努る	枉め様とめ努る
三九八	七	一本作にも	一本作るにも	五一五	七	心公共	公共心
四〇二	九	物價	物價	五二二	二	門戸解放工場	門戸解放工場
四一二	六	「雇主側」の次に「と勞働者側」を挿入	「雇主側」の次に「と勞働者側」を挿入	五四五	四	門戸閉鎖工場	門戸閉鎖工場
四一二	七	大被服業者	大被服業者	同	五	民衆使	民衆使
四一五	一一	出來又るし、	出來るし、又	同	六	希望	希望
四二二	二	損害賠償法な	損害賠償法を	五六三	一二	議員の連に	議員の間に
四二六	三	受ける年給	受ける年給	五六八	九	労働團體	労働團體
四三一	一一	工業	工業	五七七	九	壓迫攻撃	壓迫攻撃

大正十一年二月十五日印刷

著者 川邊喜三郎

病める社會
定價貳圓六十錢

不許複製

發行者	增田 義一	印刷者	佐久間 衡治	發行所	東京市京橋區南鍋町二丁目十五番地 實業之日本社 振替口座東京三二六番
-----	-------	-----	--------	-----	---

株式會社 秀印

國際聯盟の解説

再版

ヴェルサイユ會議の國際聯盟の性質、意義、價值等を平易明快に説明したり。

法學博士

蜷川新氏著

世界改造の人々

四版

世界改造の大舞臺に立てる英佛米伊露の大人物十五名の經歷抱負を録す。

大阪朝日新聞記者

伊東圭一郎氏著

改造の歐洲より

再版

在歐五年間の見聞録にして政治、經濟、勞働問題、婦人問題を批評せり。

大阪毎日新聞記者

加藤直士氏著

民衆と宣傳

再版

著者が三十餘年間の經驗より了得したる雄辯術の秘訣法なり。

加藤咄堂氏著

民族心理と文化の由來

新刊

古代、現代の各國民族に互り、性質、環境等を詳述し其民族の文化的過程を論ず。

好富正臣氏著

祖國を顧みて

十六版

深刻なる觀察と學殖とに依り縱横に西洋文明を批判し我國の文明に論及す。

法學博士

河上肇氏著

第六感を交へて

三版

觀察の鋭利、言ひ廻しの奇警、これ博士の文の特色にして輕妙の諷刺正人殺すの概がある。

理學博士

三宅恒方氏著

歐米名士の印象

新刊

著者歐米を漫遊し幾多方面の名士に接見し歸來其深刻なる印象と思想を摘録す。

法學士

鶴見祐輔氏著

旅と私

新刊

飄逸な著者の旅行中の出來事、感想、挿話及び通信を集めたもの。

理學博士

三宅恒方氏著

縮社會と自分

二十三版

收むる所長短六篇所悉く先生の性格と思想と日常生活の發露にして感銘深し。

夏目漱石氏著

教育一般性慾學

資料一 科學的見地から大膽赤裸々に解剖した性慾の新研究、萬人必讀の權威的發表。
羽太銳治氏著 定價二圓八十錢 郵稅十二錢 四六判

性慾と近代思潮

六 版 近代思潮の基調となれる性慾が文學、哲學及び婦人論に與へたる致命的影響を説く。
羽太銳治氏著 定價二圓 郵稅六錢 四六判

婦人性の研究

五 版 歐米諸大家の女性觀を論じ各人の體質、生殖器の構造と其作用、婦人犯罪等を述ぶ。
羽太銳治氏著 定價二圓 郵稅八錢 四六判

性の衛生

四 版 男女の性的關係を説き、各生殖器の衛生法及びその疾病の治療法を懇説す。
羽太銳治氏著 定價二圓七十錢 郵稅六錢 四六判

性慾研究と其疾病療法

再 版 性慾と戀愛、性交の衛生、妊娠等に關する一般知識及び其疾病療法を述ぶ。
羽太銳治氏著 定價二圓八十錢 郵稅八錢 四六判

性慾研究と精神分析學

十七 版 性慾の科學的研究事實、及び精神分析學を加へて性慾と道徳との關係を説く。
神保三郎氏著 定價二圓 郵稅十二錢 四六判

精神分析學

新 刊 最新科學たる精神分析學を平易に説明し夢、迷信、神經病、變態性慾等を解剖す。
井筒節三氏著 定價一圓五十錢 郵稅六錢 四六判

細胞の靈能と心身養成論

再 版 人體の主人公は智能でなくて細胞である、といふ新發見から教育の改造を説く。
安富衆輔氏著 定價三圓 郵稅八錢 四六判

自彊術の解説と實験談

十六 版 健康を増進し萬病を癒す自彊術の方法と效果とを詳述せるもの、今や實行者數百萬。
中井房五郎氏創始
十文字大元氏編著 定價九十錢 郵稅四錢 三六判

改訂岡田式靜坐法

百十五 版 本法今や國民の身心改造術として社會の公認する所、一讀忽ち原理を知らん。
實業之日本社編 定價七十錢 郵稅四錢 三五判

縮修

七十七版

學徳一代に冠たる博士が、其博學と經驗とに依り品性、人格、處世法を懇説す。

養

農法學博士

新渡戸 稻造氏著

縮世

四十六版

「修養」の姉妹篇、彼は主として内部生活を説き、此は主として外部生活を説く。

道

農法學博士

新渡戸 稻造氏著

縮青

二十八版

著者が多年の經驗により青年の針路を示せるもの、天下青年の必讀書である。

養

實業之日本社長

増田 義一氏著

思想

四版

帝國の現状を慮り、新時代に順應すべき健全なる思想を鼓吹して愛國の赤誠溢る。

導の基準

實業之日本社長

増田 義一氏著

大國

七版

新日本人の大常識を詳述し人格涵養の要義を縷説し眞に大國民たるの修養を叫ぶ。

根柢

實業之日本社長

増田 義一氏著

新しい主義學說の字引

十四版

思想問題を初めとし、有らぬ新しき主義學說を網羅し、之に解説を施せるもの。

勝屋 英造氏著

訂正 新しい言葉の字引

五十一版

どんな新しい言葉でも本書一冊さへ持つてゐれば、その意味が直ぐ分る。

服部嘉香氏植原路郎氏共著

常識教科書 知らぬと耻

十九版

一寸した事を知らぬ爲に飛んだ赤耻をかく例は甚だ多い、之を見ればそんな事はない。

樋口 麗陽氏著

忽ち上達する 實習寫眞術

九版

従來の寫眞術書では判らなかつた所を初心者にも判るやうに説明したので大特色。

松山 思水氏著

作法文範書 翰文大全

六版

業務用、社交用其他百般の手紙に関する文範及び諸體式、手紙道德等を詳説す。

關根 文學博士共著

生活戰術

十二版 生活戦場の勝利を得るの根本要義を縦横に論議せるもの、青年諸君の絶好書である。

法學博士 浮田和民氏 著

練膽術

三十版 磨成る所現世の境を川脱し、有ゆる煩悶妄想を一掃し得、其妙法本を書に收む。

永平寺前管長 日置 默仙禪師 述

碧巖錄講話

三版 上下二卷に分れて通俗平明に禪門の妙諦を説く。蓋し初學入門の上乗なるもの。

黄蘗派前管長 高津 柏樹師 述

無門開講話

再版 文字平明、理路整然を以て知らるゝ本書は初心の參學者間に珍重せらる。

建長寺派管長 菅原 時保師 述

鐵笛倒吹講話

再版 奥龍玄樓和尚が公案百則を選びて評唱を作りしものを更に禪師が講述せり。

永平寺前管長 日置 默禮師 述

502
61

終